（資料１）

蓮教寺本堂、蓮教寺書院、蓮教寺庫裏、蓮教寺鐘楼、蓮教寺山門及び脇塀、梵音寺本堂（れんきょうじほんどう、れんきょうじしょいん、れんきょうじくり、れんきょうじしょうろう、れんきょうじさんもんおよびわきべい、ぼんのんじほんどう）

員　数：６棟

所在地：愛知県名古屋市名東区高針四丁目 864

所有者：宗教法人蓮教寺

1　登録理由

蓮教寺本堂

名古屋市東部の丘陵地に位置する真宗高田派寺院の本堂で、典型的な真宗本堂である。

（登録基準：造形の規範となっているもの）

蓮教寺書院

本堂の背面に位置し、上段の間を持つ格式の高い書院建築。

（登録基準：造形の規範となっているもの）

蓮教寺庫裏

本堂の東側に位置し、内部は床（とこ）と付書院のある格の高い仏間を備える。

（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

蓮教寺鐘楼

山門の西側に位置し、折上小組格天井や亀の彫刻の妻飾等、華やかな印象を与える。

（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

蓮教寺山門及び脇塀

本堂の正面の参道に建つ四脚門の両脇に直角に折れた脇塀。意匠を凝らした彫刻が見られる。

（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

梵音寺本堂

境内西にある蓮教寺の塔頭（たっちゅう）。龍の彫刻欄間等、細かな意匠を示す。

（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

2　概要

蓮教寺本堂

木造平屋建、本瓦葺、建築面積 223 ㎡、太鼓楼付　建設年代　宝暦８年（1758）／宝暦 14 年（1764）・文化９年（1812）増築、平成 16 年改修

蓮教寺書院

木造平屋建、桟瓦葺、建築面積 199 ㎡　建設年代　文化９年（1812）／昭和 30 年頃・平成 27 年改修

蓮教寺庫裏

木造平屋建、桟瓦葺、建築面積 249 ㎡　建設年代　宝暦 13 年（1763）／昭和後期改修

蓮教寺鐘楼

木造、本瓦葺、面積 10 ㎡　建設年代　明治 15 年（1882）

蓮教寺山門及び脇塀

山門　木造、本瓦葺、間口 3.7m　建設年代　文化９年（1812）／平成 12 年改修

脇塀　木造、本瓦葺、総延長 23m　建設年代　文化９年（1812）／平成 12 年改修

梵音寺本堂

木造平屋建、桟瓦葺、建築面積 38 ㎡　建設年代　寛政 10 年（1798）／昭和後期改修

法雲山蓮教寺は、日進市や長久手市にほど近い、名古屋市名東区高針に位置する。平安時代長徳年間（995～998）に創建し、当初は天台宗に属し、高針山と号した。永禄元年（1588）または同４年、真宗高田派に改宗し、蓮教院、蓮華蔵教院、明眼寺とも称された。元和初年（1615～18）に法雲山蓮教寺と改称し、正徳６年（1716）に現在地に移転した。現存の伽藍は、大部分が宝暦（1751～64）から文化（1804～18）年間に、寺門隆盛に伴い段階的に整えられた。『尾張名所図会』（天保 12 年（1841）刊行）にも紹介されている。

伽藍は南に傾斜した丘陵の中ほどに位置し、敷地南側から参道の石段、山門、本堂が直線状に並ぶ。本堂の北側に書院、東側に庫裏が配置され、庫裏と本堂は太鼓楼[1]付の玄関でつながっている。

また、山門の西側に鐘楼があり、さらに西奥に塔頭[2]の梵音寺本堂が建っている。

本堂は、宝暦８年（1758）２月 15 日上棟の棟札が残り、棟梁名に名古屋の名門堂宮大工伊藤家の伊藤平左衛門道房と記されている。木造平屋建、寄棟造、本瓦葺で南を正面として建つ。内部の平面は左右対称で、桁行５間、梁間５間に、正面中央に１間の向拝[3]、外陣[4]、矢来内[5]、内陣[6]、東西余間[7]、東西下屋等で構成され、東側の太鼓楼付の玄関に接続している。太鼓楼付の玄関及び東西下屋は後設のものである。

書院は、寺蔵文書によると、寺院建立願提出後の文化９年（1812）に山門と共に竣工した。

木造平屋建、切妻造、桟瓦葺で、桁行７間半、梁間６間半の規模である。居室の配置は、中央で東西２列に分けられ、南北に３室を並べる「六間取」で、東西両側に広縁と南面東端に玄関が付き、玄関から本堂・庫裏に接続する。西側奥にある 14 畳の「上段の間」は、奥８畳を一段上げ、西面に付書院を備える。天井は格天井で、床の壁、室内の小壁を水墨の障壁画の貼付壁とし、最も格の高い部屋となっている。

庫裏は、寺蔵文書によると、知多郡布土の大工林平円助とその門弟の幸助・幸七である。

木造平屋建、切妻造、桟瓦葺、妻入で、桁行９間半、梁間４間に東西及び北の三方に下屋が付く。西側の中ほどで太鼓楼付の玄関に接続し、北西で本堂・書院と廊下でつながり、北東には別棟の茶室が付いている。南に土間、北は東西３列に分けられ、西側１列は南から「到来の間」、「次の間」、「仏間」と公的な空間が連続する。最奥の「仏間」は、東西に襖を隔てて仏壇を安置し、北側に床と付書院を構え、庫裏の中で最も格式のある部屋となっている。一方、東側２列は作業空間・生活空間となり、台所や納戸を備える。外観は、南北・西面が真壁漆喰塗で、東面は後補

の鋼板張である。

鐘楼は、山門の西に妻を東西に向けて建つ。木造入母屋造[8]、本瓦葺で、桁行１間、梁間１間、玉石積の基壇上に丸柱を四方転びに立て、柱上に台輪を廻して上部に出組の組物[9]を載せ、丸桁を受けている。折上小組格天井[10]で、軒は二軒扇垂木[11]、妻飾は亀の彫刻が施されている。

山門及び脇塀は、木造、１間１戸、四脚門、切妻造、本瓦葺で本堂の正面の参道に建つ。門の東西両脇には本瓦葺、土壁漆喰塗の脇塀が直角に南側に折れて配置され、東脇塀に潜戸が付く。

主柱は２本の丸柱、控柱は４本の几帳面取の角柱で、妻面の虹梁[12]中央では笈形[13]付の大瓶束が棟木を支える。虹梁の唐獅子の蟇股や木鼻の獏と唐獅子の彫刻等、意匠を凝らしている。

梵音寺本堂は、蓮教寺の塔頭で、木造平屋建、正面入母屋造、背面切妻造、桟瓦葺で、桁行３間、梁間３間の規模である。内部は正面中央から１間の向拝、６畳の外陣、４畳の内陣と続き、その周囲の南・東・北の三方に幅半間の縁を廻す。内外陣境の欄間には龍の彫刻は豪華であり、外陣東面の欄間には菱格子に家紋の桔梗をあしらった彫刻が見られる。

蓮教寺の伽藍は、江戸時代後期を中心とした古刹の姿を今日に伝える重要な建築遺構である。

太鼓楼[1]：太鼓を納めた建物。

塔頭[2]：寺院の敷地内にある小寺院。わきでら。

向拝[3]：神社本殿や仏寺本堂で屋根の一部が前方に突き出し、拝礼の場所となっているところ。

外陣[4]：神社本殿や仏寺本堂の、内陣の外側で参拝する場所。

矢来内[5]：参拝の場所である外陣と内陣を分ける段差や柵。

内陣[6]：神社本殿や仏寺本堂の、神体または本尊を安置した場所。

東西余間[7]：本尊の両脇にある間。

入母屋造[8]：屋根形式の一つ。上部を棟から両側に流れる切妻とし、下部の四周に庇や屋根を回した形態。

組物[9]：柱など軸部と小屋組の梁、桁等の間に設けられ、上部の荷重を軸部にスムーズに伝えるもの。

折上小組格天井[10]：周囲に支輪を設けて高くした天井。支輪で折上げにした小組格天井を折上小組格天井という。

扇垂木[11]：扇を開いたように放射状に軒の端部において取り付けられた垂木。

虹梁[12]：柱間に架け渡した梁で、弓形に湾曲した形状したもの。

笈形[13]：蟇股の中央に瓶のような形をした短い束（大瓶束）を立てたようなもので、機能は蟇股とほとんど同じである。

蓮教寺本堂と庫裏（名古屋市教育委員会提供）

蓮教寺本堂　正面（名古屋市教育委員会提供）

蓮教寺本堂　外陣より内陣を見る

（名古屋市教育委員会提供）

蓮教寺書院　西面

（名古屋市教育委員会提供）

蓮教寺書院　上段の間　西面、北面

（名古屋市教育委員会提供）

蓮教寺庫裏　次の間より仏間を見る

（名古屋市教育委員会提供）

蓮教寺鐘楼　南面

（名古屋市教育委員会提供）

蓮教寺山門及び脇門　正面

（名古屋市教育委員会提供）

梵音寺本堂　正面（東面）

（名古屋市教育委員会提供）

梵音寺本堂　外陣より内陣を見る

（名古屋市教育委員会提供）